

〈論文〉

自主管理都市共同体ビジャ・エルサルバドル ——代替的社会主义論のためのフィールド・ノート（予備的省察）——

原田 金一郎

目次

I 開題

II ビジャ・エルサルバドルの歴史

III フィールド・ノート

IV 結語

参考文献目録

Resumen

I 開題

1989年から91年にかけて、ソ連・東欧のいわゆる「現存社会主義」体制は崩壊した。その崩壊の原因はなにかという追求はあまりされなくて、もっぱらその後のこれら諸国を「移行経済」と呼んで議論がなされているように見受けられる。はたして、これでよいのであろうか——このような疑問が筆者の出発点であった。

そもそも社会主義の開祖マルクスによれば、社会主義とは、「自由な小生産者による協同」であった¹⁾。いつ、どこで、これが「中央集権的計画経済」と

1)さらにいえば、この言葉はマルクスにオリジナルなものではない。エンゲルスが「空想的社会主義」として断罪した、初期社会主義者のサン・シモンやロバート・オーエンによる言葉をマルクスは継承しているのである。[和田 1992: 31]

なってしまったのか。疑問は残る。そして、もっと重要なことは、もし現存社会主義が垂流のひとつにすぎないのであるならば、本来の、それにとって代わるべきオルタナティブな社会主義が存在するはずである。これを、かりに代替的社会主義と呼ぶことにしたい。

このような意味において、ペルーのビジャ・エルサルバドルの自主管理都市共同体が注目されてよいと思われる。

本稿は、1999年3月の1週間の予備調査と8月の1か月の本調査の成果を中間総括としてまとめたもので、いまだ未完成なものであることをおことわりしておきたい。

Ⅱ ビジャ・エルサルバドルの歴史

1 端緒期

1971年5月1日、ペルーの首都リマ郊外のパンプロナの公有地においてひとつの土地侵入 (invasión) が発生した。これがビジャ・エルサルバドルの誕生の時であった。参加者は200世帯とも300世帯ともいわれている。あらかじめ占拠する土地を測量しておき、リーダーの指導のもとに組織的かつ計画的に占拠は実行された。つまりこの時から民衆の連帯、いいかえると共同体的な紐帯が存在していたのである。

5月5日、住民にたいする抑圧がはじまる。ラモス・キスぺ (Edilberto Ramos Quispe) が殺害され、ビジャ・エルサルバドルの最初の殉死者となった。

当時、政権についていたベラスコ大統領は「革命的軍事政権」を標榜しており、代替地を与えるという形でこの占拠を支持した。5月11日、民衆はタブラダ・デ・ルリンに移住した。こうして、パチャカマ遺跡に隣接する半砂漠状の砂地に新しいスラム (pueblo joven, barriada) が生まれ、人々はこれをビジャ・エルサルバドルと命名した。

さっそく同年11月に最初の小学校が、12月に最初の中学校が建設された。住民の教育に関する熱意がうかがえる。

1973年7月、住民総会において第1次協約 (convención)が決議された。そのなかでもっとも重要なものは、社会的所有法の制定と共同体信用金庫の設立であった。同年9月共同体信用金庫が設立された。住民から預金を募ってそれを融資するという発想はすぐれてはいたものの、その実行にあたっては種々の問題がはらまれていた。

社会的所有法にもとづいて共同体所有の鉄工所と灯油スタンドが発足した。ビジャ・エルサルバドルの燃料は灯油だったので、この選択は当初合理的であるかに思われた。しかし、やはり経営に問題があったためか、これらものちに民営化される。

住民の意識はどうであったのか。コロナドはこうのべている。「ビジャ・エルサルバドルの共同体の歴史をつうじて明らかなように、社会主義、そして資本主義の拒絶ということの明白な確認がみられた。その最初の協約以来、ビジャ・エルサルバドルの住民は、資本制システムを拒絶し非難し、資本制システムにもとづく社会的、経済的、政治的および文化的組織のあらゆる形態を拒否し、そして連帯と友愛の社会主義原理をその社会運営、近隣組織および政治的文化的創造に組み入れようとしたのである」²⁾。

2 CUAVESの結成

1973年11月、ビジャ・エルサルバドル自主管理都市共同体 (Comunidad Urbana Autogestionaria de Villa El Salvador, CUAVES)が発足する。サパタによれば、CUAVESの命名者は、初期の指導者の一人であるアラゴン (Antonio Aragón)である³⁾。「さらにかれば、共同体が生産を指向すること、国家と協力して工業経済発展の活動的主体となること、を望んでいた」。アラゴンは、土地の集団的所有も考えていたそうである。このようにサパタによれば、アラゴンの考えは、きわめてユートピア的であり、ある意味では非現実的であった。「これらの夢は、よりよい未来を築くためのメカニズムとしての協働 (cooperación)にたいする信頼に基礎を置いていたが、それはまったく欠けてい

2) Coronado 1996 : 13.

3) Zapata 1996 : 91.

た」。

CUAVESの組織は、以下のようになっていた。まず立法的側面においては、ボトム・アップ構造になっていた。(1) 地区 (manzana) 委員会 (1 地区=24世帯から5名の代議員を選出)、(2) 居住集団 (grupo residencial)の中央指示評議会 (Junta Directiva Central、1 居住集団=16地区=384世帯、8名の代議員選出)、(3) 代議員総会。そして行政的側面においては、トップ・ダウン構造になっていた。(1)代議員総会、(2) 共同体執行審議会 (Consejo Ejecutivo Comunal、CEC。7~8名の書記からなる共同体の中核組織)、(3) 監視委員会、経済領域審議会 (生産、サービスおよび商品化)、社会領域審議会 (教育、衛生、社会保障)、支援組織、計画化委員会、金融経済単位、総合管理単位、勧告委員会および特別委員会。

こうして1970年代のCUAVESは、5000人の代議員を擁することになる。ちなみに、当時のビジャ・エルサルバドルの人口は12万5千人であった。これら住民の職業構成は、職人および労働者37%、商人33%、左官20%、サービス7%、農牧業3%であった⁴⁾。

3 CUAVES期年表 (1973~1984)

1974年10月、民衆コミュニケーション・センター (Centro de Comunicación Popular)設立。当初はラジオ局だけだったが、現在はテレビ局もあり、リスナーは400万人を越すとのことである。

1975年12月、街灯設置。

1976年4月23日、政府宮殿への行進。3万人の住民が教育問題の解決を要求。

1977年7月19日、全国スト。ビジャ・エルサルバドルの最初の参加。

1978-79年、教員組合 (SUTEP) の全国スト。父兄による教育施設の占拠。

1979年5月23日、全国スト。カンポス・ロケ (Primitivo Campos Roque)殺害さる。ビジャ・エルサルバドルの第2の殉死者。

4) ibid. : 101.

1979年5月、第3次協約。この協約は、共同体信用金庫の閉鎖、社会的所有法による共同体企業の廃止など、自主管理モデルの破綻を意味する重要な後退を意味した。

1980年、衛生・教育施設の建設開始。

1984年、市当局 (Municipalidad) 発足。

4 市当局支配体制化 (Municipalización) 期 (1984 ~ 現在)

ビジャ・エルサルバドル市初代市長であるアスクエタ (Michel Azcueta) は、1982年の講演において、自主管理社会主義は資本主義の海のなかの島ではありえない、と批判し、CUAVES 衰退の理由として次の4点をあげた⁵⁾。

1) 1975年以降のペルーの経済危機。

2) ベルムデス政権 (1975-80年) による恒常的抑圧。

3) 選挙のための政治的キャンペーンが隣人組織にダメージをあたえたこと。

4) 共同体執行審議会 (CEC) とりわけロハス (Apolinario Rojas, CUAVES の初期のリーダーの一人) の反民主的行為。

これにたいし、CUAVES はこう反論している。「CUAVES と市当局は2つの異なる組織であって、とりかえたり除去されることはない。しかしながら、CUAVES はビジャ・エルサルバドルの民衆の防衛と闘争の自治的機関である……他方では、市当局は国家の地方機関である」⁶⁾。さらにCUAVES は批判する。「市 (municipio) とは、ゴミ、排水、公園や道路の問題に対処するために、もろもろの税をつうじて住民から経済資源を流出させる資本制国家の地方行政機関である」⁷⁾。このように、当初から両者は鋭く対立しており、この対立関係は現在もなお継続している。

こうして、CUAVES 期は終結し、かわって市当局が支配する第2期が始まった。住民たちが熱く語りあった「集会文化 (cultura de asamblea)」の時代は過ぎさり、豊富な技術と資金をもつ市当局が実権を握ったのである。

5) Ferradas 1983 : 99.

6) Coronado 1996 : 60.

7) *ibid.* : 62.

しかし、CUAVESの影響力が低下したのは事実であるが、いまなお存在しているし、なによりもビジャ・エルサルバドル市民は、CUAVESを底辺からささえていた共同体構成員でもある。このような意味において、市当局もCUAVESの影響をまったく無視するわけはいかないのである。実際に、このような対立関係を改善して第3期にむかうべきだ、との意見も聞かれた⁸⁾。

さらに、市当局側にも新しい動きが最近みられる。1999年10月24日ビジャ・エルサルバドルでは「開発計画 (Plan de Desarrollo)」にたいする住民投票が行なわれた。この開発計画そのものが、CUAVESがかつて提案していたものであるし、住民の意向を尊重する姿勢からは、住民自治の尊重という新しい政策が反映されているといつてよいだろう⁹⁾。

III フィールド・ノート (インタビュー)

以下に紹介するのは、筆者が1999年8月に行なったインタビューから抜粋したものである。インタビューしたのは、元CUAVES幹部3名と、現市長を含む市当局幹部2名とである。

1 元CUAVES幹部とのインタビュー

(1) ヤラスカ (Epifanio Pérez Yarasca、元CUAVES初代会長、アヤクチョ県出身の先住民、80歳)

——自主管理は先住民共同体に由来するものである。それは、資本主義ではなくて、社会主義である。また、ホセ・カルロス・マリアテギ¹⁰⁾の思想・理論との関係が深い。

8) 後述のインタビューにおけるニチョの発言。

9) 10月24日の住民投票の結果については、本稿を執筆中の12月末現在、筆者からの請求にたいしペルーからはなんの連絡もないのでコメントできない。

10) José Carlos Mariátegui, 1894-1930. ペルーの偉大な思想・理論家。[マリアテギ 1988および1999] 参照。

——社会主義とはプレ・インカ時代以来の伝統である。また協同組合での経験が基礎となっている。アイユ（家族共同体）の存在も影響を与えている。そして、ホセ・カルロス・マリアテギの『ペルーの現実解釈のための七試論』[マリアテギ 1988] に書かれていることが妥当する。

[以上のように、ヤラスカは、CUAVESの自主管理社会主義の起源を先住民共同体に求めている。このような考え方を、インディヘニスモ（先住民復権思想）説と呼んでいいであろう。そして、自主管理社会主義の起源の「内生説」とも分類されうる。さらにヤラスカの考え方の特徴は、ホセ・カルロス・マリアテギの思想・理論（マリアテギスモ、mariateguismo）の影響が強いことにある。その死後70年を経ていまだにマリアテギスモが生命を失っていないという現実に驚かざるをえない。]



ヤラスカ

(2) アルバニル (Juan Arbañil, 元CUAVES 渉外担当書記、現在市分庁長、62歳)

——1971年6月ビジャ・エルサルバドルにきた。当時3つのグループがあったが、組織化されていなかった。南部やセルバ出身の農民たちが組織化に寄与

した。そして、Junta Directiva を結成、gran asamblea conjunta を開き、やがて1973年にCUAVESを結成した。

——その目標は、民主主義、連帯、自治政府 (autogobierno) であった。CUAVESの3つの要因は、(1) 地区別組織化、(2) 開発プロジェクト (autodesarrollo、すべての人が参加)、(3) 参加民主主義であった。参加民主主義とは、農民がその協同組合での経験を生かして参加することであった。

——自主管理社会主義の起源については、70年代の軍人政権が社会主義と十全な参加を語っていたことがあげられる。もうひとつの起源は、ユーゴスラビアの影響である。ただし、ペルーでは貧困が生み出したものであるということ、国家が上から押しつけたものではなく基底から突き上げたものである、という違いがある。

——現在でも他地域において共同体が活動している。(1) チクラヨの都市共同体、(2) クスコ (県) にも同様のものがあり、(3) アンカシュでは25のプエブロ (村) が共同体を結成しており、さらに(4) セルバ (熱帯雨林地帯) では先住民共同体が存在している。

——1984年に市当局が設立された時は、実現可能とは思っていなかったの



アルバニル

驚いた。当初は共通の考えをもっていたが、しだいに別れていき、別個の組織となった。市当局は技術と資金をもっている。CUAVESは人間を抱えている。

——現在の組織としてのCUAVESとその構成員とを区別する必要がある。構成員は住民であり、隣人組織のもとにある36万人の自主管理都市共同体構成員(cuavistas)がなおも健在である。

——社会主義とは、他国の模倣によって築かれるものではない。ホセ・カルロス・マリアテギは「社会主義はコピーや模倣からは生まれない」と述べている。それは、人格の変革であり、モデルではなくて分配の平等である。これに反して資本主義とは、搾取、個人主義、富の集中を意味する。ペルーは文化や民族が多様である（ケチュア、アイマラなど）。したがって、固有の発展・社会モデルを築く必要性がある。

(3) ニチヨ (Victor Nicho Bazador、元CUAVES経済担当書記、コレヒヨ・デ・パチャクテク校長、51歳)



ニチヨ

——ビジャ・エルサルバドルの歴史は3期に分けられる。

1) アントニオ・アラゴン指導期

ベラスコ政権との結びつきが強く、地方自治体としての諸施策に力を注いだ。水道・道路・教育などに助成を行なった。

2) アポリナリオ・ロハス指導期

ベラスコ政権を批判し、チリのアジェンデやアルゼンチンのペロンの影響を受けていた。資本主義の枠内での改革をめざしていた。社会主義については、国家の責任が問題であると考えていた。同時に、社会化(socializante)の必要性を主張していた。

3) ミチエル・アスクエタ市長期

1976年住民が水道・電気を要求して起こしたビジャ・エルサルバドル最大のデモにたいし、そののち市当局がこの問題を解決した。その結果CUAVESは組織を失った。

—CUAVESの影響力が低下し、市当局に代替されてしまった理由は2つある。1つは、政治・経済上の指導者の誤りである。2つめは、選挙運動において政党の制度化に失敗したことである。

—社会主義とは、必要に応じての総体的な生産物の分配である。その例が社会的所有であり、ビジャ・エルサルバドルにおいては、実践からえたのであるが、集会によって運営されていた。

—自主管理とは、ベラスコ政権の代表者たちが用いていた用語であり、農民・工業・共同体にたいするベラスコ政権の政策を体現するものであった。われわれは、これと区別するために「都市」を名乗った。また、ユーゴスラビアの例もモデルとして利用したが、ユーゴでは国家が管理していた点がビジャ・エルサルバドルとは異なっている。

—ホセ・カルロス・マリアテギについては、マリアテギスモは社会主義であるということ、社会問題の解決という点において、ビジャ・エルサルバドルと関連が深い。

—CUAVESの現状については、官僚的になっているということ、住民参加がなく動員力がないこと、新しい現実への対応策がないこと、などが挙げられる。しかし、労働者や小生産者たちの問題にとって組織としての必要性は

あるし、現状からの組織化が可能なほどの潜在的な能力をもっている。市当局と衝突ばかりしているが、なんらかの解決策を模索すべきである。

——資本主義とは、私的資本が人間活動のすべてを支配するものであり、必然的に個人主義をもたらす。そこで、われわれは、共同体セクターによるすべてのものの社会化を考えていた。現在、土地は私的所有だが、われわれは土地の社会化を考えていた。

——共同体信用金庫の失敗については、無利子で融資するといったユートピア的な経営がその原因のひとつであるが、政治的な理由のほうがもっと大きい。また、企業家精神の欠如も失敗の原因のひとつであろう。

——ビジャ・エルサルバドルは、第3段階という新しい段階に入りつつある。現在のビジャ・エルサルバドルは、社会主義ではない。[社会主義は]資本制システムのなかの島ではありえない。現在では集会に40～50人しか集まらない。かつては何百人と集結したものだ。今後は、市当局と地区組織の関係がもっとも重要な意味をもつであろう。

2 市当局幹部とのインタビュー

(1) プマル (Martín Pumar、ビジャ・エルサルバドル市長、1999年1月就任、30歳)



プマル

自主管理都市共同体ビジャ・エルサルバドル

——ビジャ・エルサルバドルとホセ・カルロス・マリアテギの関係についていえば、ビジャ・エルサルバドルは一種のインディヘニスモ社会主義であるといえる。この市の文化においては農民が主体である。つまり、共同体労働の残滓が存在しているのである。

——現在の市当局の政策の象徴は「開発計画」である。この政策をつうじて、われわれは公正な都市 (ciudad justa)をめざしている。

——開発計画の内容は、人的開発、家族の紐帯の強化、市民としての個人の確立である。そして、開発過程に参加することが重要である。なぜなら、ここではいまだ市民化が不十分だからだ。発展とは人間の変革でなければならない。開発計画は、管理委員会 (comité de gestión)がプロジェクトを推進し、市当局は助力するだけである。つまり、自力依存が重要なのだ。

——きたる10月24日、この開発計画は住民投票にかけられる。そこでこの計画の目標である、(1) 都市的發展、(2) 市民文化の解放、(3) 人的開発、の是非が問われるわけである。

(2) リオス (Nestor Rios Morales、市当局幹部、35歳)



リオス

—現在のビジャ・エルサルバドルにおける権力は次のようになっている。まず強力な組織は、市当局、女性組織（Federación Popular de Mujeres de Villa El Salvador）、そして企業主たち（個人経営が多い。工業団地においては1万5千人が働いている）である。CUAVESは凋落している。1970年代は強力であったが、諸要求がとおったのち、かわりの目標をもちえなかった。また指導者がいない。

—現在、市当局がもっとも力を注いでいるのが「開発計画」である。その特徴は、住民参加による開発であり、1999年1月計画作成が開始された。そのスローガンは、民主主義と連帯である。理論的にはネオ・リベラルの立場に立っている。

—1984年以来、Vaso de Leche 計画に参加している。この計画は、子供の



市庁舎

いる家庭に無料で粉乳を配布するものであるが、その対象は12万1千世帯に及んでいる。この計画は社会的支援 (asistencia social)の一環として行なわれており、社会主義的なものではない。

——市当局の政策目的は、連帯共同体 (comunidad de solidario)である。自由競争にもとづくという点においては、資本主義である。またこのような考え方は、貧困の哲学であるともいえよう。このわれわれの立場が、社会民主主義であるかどうかはわからない。すこしずつ社会化することが大切である。そして、なによりも重要なことは自治政府 (autogobierno)の再建である。

IV 結語

以上のような文献研究とフィールド・ワークの成果から、次のような3つの仮説を導き出すことが可能である。

1 自主管理社会主義の起源について

ビジャ・エルサルバドルの1970年代の自主管理社会主義の起源については、3説がある。(1)ベラスコ政権のスローガンであったとする説(内生説)、(2)先住民共同体に端を発するとするインディヘニスム説(内生説)、(3)ユーゴスラビアの影響とする説(外生説)。

現実においては、これら3説がからみあって要因をなしていたと考えられるが、そのなかでもっとも強力であったのはインディヘニスム説であろう。その根拠は、ビジャ・エルサルバドルの端緒期から農民は都市共同体の中心的な役割をはたしていたという証言がいくつかあることである。

このように、先住民共同体に社会主義の要素が存在することを指摘したのは、ホセ・カルロス・マリアテギである。1920年代に書かれたマリアテギの先駆的な書物 [マリアテギ 1988] は、いまもなおペルーにおいて少なからぬ影響力をもっているのである。したがって、ビジャ・エルサルバドルの自主管理社会主義は、ホセ・カルロス・マリアテギの思想・理論の現代的適用だといえるで

あろう。

2 代替的社會主義論とビジャ・エルサルバドルについて

「開題」においてのべたように、ビジャ・エルサルバドルの社會主義は、オルタナティブな社會主義のひとつであるといえる。このような代替的社會主義論について筆者は、簡略なスケッチのようなものであるが、かつて概念化を試みたことがある¹¹⁾。

それによれば、代替的社會主義には、3つの要素が考えられる。(1) 混合經濟(*economía mixta*)¹²⁾——国家所有、社会的所有、私的所有という多様な所有形態からなる經濟。これらの所有形態のあいだでの競争は重要な役割をはたす。なかでも社会的所有がキー・ファクターで、将来的にはこの形態に収斂していくものと考えられる。(2) 参加民主主義(*democracia participativa*)——間接民主主義ではなく、直接民主主義が重要な役割をはたす。そして、民衆の参加は、政治のみならず、經濟(生産と分配)、および文化などの多領域において実行されるべきである。(3) 民際主義(*inter-populismo*)——国家と国家のあいだの関係(*internacionalismo*)ではなくて、民衆と民衆が直接的に交流し連帯すべきである。このようにして、国家と民族の問題の止揚をめざすことが可能となろう。この最後の要素は、ビジャ・エルサルバドルのケースでは欠如していた。

3 貧民コミュニオンとビジャ・エルサルバドル

ビジャ・エルサルバドルは、「スラムの自立化」の一経験と受けとめられているが、それにとどまるものではない。筆者の考えをあえていえば、ビジャ・エルサルバドルは、「貧民コミュニオン」とも呼びうるものなのである。

このような、地方自治体のコミュニオン化の先駆例としては、スウェーデンのフリーコミュニオンがある¹³⁾。1983年社会民主党下のスウェーデンにおいて開始

11) Harada 1993.

12) 混合經濟については、筆者によるニカラグアにおける論争の検討を参照されたい。[原田 1997]

された地方自治体の改革の実験は、政府による規制緩和（deregulation）と分権化（decentralization）を出発点としていた。そして、コミュニオン側から分権化の要求がもっとも多かったのは、（1）学校教育、（2）都市計画および都市開発、（3）保険サービスおよび医療にかんするものであった。このようなコミュニオン下にある住民は、総人口880万人のうち100万人を越すという。

ビジャ・エルサルバドルとスウェーデンとの差異は、スウェーデンには政府から地方自治体へのトップ・ダウン構造があつて、それをボトム・アップ構造に転換しようとしたところに特徴がある。これに反してビジャ・エルサルバドルでは、ボトム・アップから出発し、むしろ政府を突き上げて諸要求をかちとってきた。そして現在では、市当局をつうじて政府からのトップ・ダウン構造を押しつけられようとしているのである。

しかし、いまや人口36万人にのぼるビジャ・エルサルバドル住民は、過去の自主管理の時代に主体として生きてきた人々である。その歴史はけっして消滅はしない。それを知っているからこそ、市当局は「開発計画」の住民投票を試みたのである。そこには、新しい「都市共同体」を模索しようとしている気配がうかがえる。このような意味において、今後もこの都市共同体の行く末には興味がつきない思いである。

[付記]

本稿は、1999年11月14日ラテンアメリカ政経学会（於横浜国大）において行なった研究報告をベースにしてまとめたものである。

参考文献目録

BIBLIOGRAFIA (欧語文献目録)

1 Fuentes Primarias(Entrevistas)

con Epifanio Pérez Yarasca(19/8/99)

con Juan Arbañil(11/8/99)

con Víctor Nicho Bazalar(12/8/99)

con Martín Pumar(31/8/99)

con Nestor Rios Morales(9/8/99)

2 Fuentes Secundarias

Azcueta, Michel

1992 "Acuerdos y desacuerdos en la historia de Villa El Salvador." En:Blondet, Cecilia,*Democracia, paz y desarrollo en el ámbito local urbano*,Lima : IEP.

Blondet, Cecilia

1991 *Las mujeres y el poder:una historia de Villa El Salvador*,Lima : IEP.

1991 "Las organizaciones femeninas y política en época de crisis." En : Feijó, María del Carmen;Herzer, Hilda María,*Las mujeres y la vida en las ciudades*, Buenos Aires :Editor Latinoamericano .

Burga, Jorge B.

1989 *Villa El Salvador,la ciudad y su desarrollo:realidad y propuesta*,Lima : CIED.

Burt, Jo-Marie;Espejo, Cesar

1995 "The Struggles of a Self-built Community ." In:NACLA ,*Report on the Americas*, No.4.

Coronado,Jaime;Pajuelo,Ramón

1996 *Villa El Salvador:poder y comunidad*,Lima : CECOSAM-CEIS.

Ferradas, Pedro(ed.)

1983 *Villa El Salvador:de arenal a distrito municipal*, Lima : CELADEC.

Gamarra, Donatilda et als.

1992 "Mujer y participación política." En: Córdoba, Patricia (ed.), *Mujer y liderazgo: entre la familia y la política*, Lima : Yacuta.

García Nuñez, Gonzalo

1989 *Circuitos productivos: la pequeña producción de Villa El Salvador*, Lima : Fundación Friedrich Eberto.

Harada, Kinichiro

1993 "José Carlos Mariátegui y el socialismo alternativo". En : *Encuentro Internacional, José Carlos Mariátegui y Europa, el otro aspecto del descubrimiento*, Lima: Empresa Editora Amauta.

Pimentel Sevilla, Carmen (ed.)

1995 *Violencia, familia y niñez en los sectores urbanos populares*, Lima : CECOSAM.

Pomar Ampuero, Nelly

1997 "Gobierno local, ciudadanía e izquierda en Lima metropolitana : independencia y Villa El Salvador." En: Balbi, Carmen Rosa (ed.), *Lima: aspiraciones, reconocimiento y ciudadanía en los noventa*, Lima: PUCP.

Tavara, Jose I

1994 *Cooperando para competir: redes de producción en la pequeña industria peruana*, Lima : DESCO.

Zapata, Antonio

1996 *Sociedad y poder local: la comunidad de Villa El Salvador, 1971-1996*, Lima : DESCO.

Zeballos, Eduardo

1991 "Villa El Salvador: tiempos de lucha y organización." En : Riofrio, Gustavo, *Lima : para vivir mañana*, Lima: CIDIAG/FOVIDA.

(邦語文献目録)

岡沢憲芙

1991 『スウェーデンの挑戦』岩波書店。

原田金一郎

1997 『周辺資本主義論序説——ラテンアメリカにおける資本主義の形成と発展』藤原書店。

ボルデシュハイム、ハラール／ストールバリ、クリステル著 大和田ほか訳

1995 『北欧の地方分権改革——福祉国家におけるフリーコミュニケーション実験』日本評論社。

マリアテギ、ホセ・カルロス著 原田金一郎訳

1988 『ペルーの現実解釈のための七試論』柘植書房。

同上 辻豊治／小林致広編訳

1999 『インディアスと西洋の狭間で——マリアテギ政治・文化論集』現代企画室。

和田春樹

1992 『歴史としての社会主義』岩波書店。

[Resumen]

Comunidad Urbana Autogestionaria de Villa El Salvador : un socialismo alternativo

Kinichiro Harada

Villa El Salvador es una ciudad peruana con 360,000 habitantes que se caracteriza por tener una historia de socialismo autogestionario. Su historia empieza en el año 1971 con la "invasión" a Pamplona de 200 familias. En ese mismo año estas familias se trasladan a la Tablada de Lurín y nombran esta barriada Villa El Salvador. En 1973 se organiza Comunidad Urbana Autogestionaria de Villa El Salvador(CUAVES).

CUAVES era una organización que estaba caracterizada por un socialismo autogestionario. "Los pobladores de Villa El Salvador rechazan, condenan y repudian toda forma de organización social, económica, política y cultural basada en el sistema capitalista".

CUAVES estaba organizada por (1)el Comité de Manzana (24 familias), (2)la Junta Directiva Central de Grupo Residencial (16 manzanas, 384 familias), y (3)la Asamblea Plenaria. En la década de 70 el número de dirigentes de CUAVES era excesivo. Compárese el número de habitantes de Villa El Salvador (125,000) con los 5,000 dirigentes.

La característica esencial de CUAVES era la vigencia de la ley de Propiedad Social. La Caja Comunal, la ferretería y los grifos fundados en base de esta ley, tuvieron una existencia corta pues fracasaron por la falta de administración eficiente.

En el año 1984 se fundó la Municipalidad lo que provocó una declinación de la

influencia política de CUAVES. Así empieza la segunda etapa de historia de Villa El Salvador. La Municipalidad tiene "la tecnología y el capital", entonces domina Villa El Salvador. De todas maneras la influencia de CUAVES permanece vigente porque los ciudadanos eran miembros de CUAVES.

El origen del socialismo autogestionario de Villa El Salvador se puede encontrar, según Epifanio Pérez Yarasca, en las comunidades indígenas de la época pre-incaica. Esta interpretación indigenista está influido por el pensamiento de José Carlos Mariátegui.

Después de caída del "socialismo realmente existente" entre los años 1989 y 1991, surge la necesidad de buscar otro tipo del socialismo que podemos llamar "socialismo alternativo". Las características de este nuevo socialismo son la existencia de (1) economía mixta en la que la propiedad social es más importante que la propiedad estatal y privada, (2) democracia participativa (no solamente en lo político sino también en lúo económico, cultural y todos los aspectos de la sociedad), (3) inter-populismo (no es internacionalismo, sino las relaciones directas entre pueblo y pueblo). Aunque este último aspecto faltaba en CUAVES, el socialismo autogestionario de Villa El Salvador podría conciderarse un ejemplo del socialismo alternativo.

Creo que este socialismo autogestionario de Villa El Salvador surge como una respuesta y lucha contra la pobreza. Los progresos obtenidos gracias a la solidaridad y cooperación que es base del sistema hace que, aun actualmente, la Municipalidad procure conservar esa característica de "comuna".